

研究・教育雑感



佐藤 嘉夫

時間と時代

10年一昔などと言いますが、学生たちが、その程度の遡日を、本当に「むかし」というのには驚かされました。確かに、開学から15年も経てば、昔日の感は否めません。私などは、団塊の世代（私はこの言葉は好きではありませんが）というか、初中等教育は良くも悪くも戦後民主主義教育の世代、学生の時は、いわゆる輝かしき紛争世代に属し、高度経済成長を成し遂げた実態社会を後付する先鋭理論で武装し、いわゆる Strum und Drang の時代を、先駆けたという自負が、骨の髄までしみこんでいて、中古品、骨董品みたいに言われると無性に腹立たしくなるのですが、今は、それも無理はないか、などと、妙に他人ごとの様に・・・。

大学院を出て、たまたま縁があって、東京都老人総合研究所という、日本の gerontology の草分け的研究機関で禄を食んでいたこともあり、私は、人が老いていくということ（老化の社会的側面）を研究の柱の1つにしてきました。そこから盗んだうんちくというには、あまり確証は無いのですが、学生たちがそのように感じるの、ひとつは、若いときほど人間の心理的、生理的体内時計のメモリの刻みが小さいことがあるように思います。細かい時間の流れを敏感に感じ取ることが出来るので、時が刻々と、事象が次々と流れていくように感じられるのかもしれませんが。若いときのことは克明に覚えているというより、鮮明に再現できるのも、最も成長した若い脳とこの時間メモリのお陰なのかもしれません。それは、裏返すと、老いるに従って、メモリが大雑把になって、時間はゆるやかに流れているようなだけでも、一つ一つのことがあまり定かでないといったことになるのでしょうか。老いていく過程で、経験知を積み重ね、人間は熟成しますので、その蓄えた能力で、どうにかやり繰りをしていくわけですが、毎年、新入生が入ってくる度に、同じことの繰り返しが始まるような感覚にとられるように

なったら、教員は、潔く辞めようなどと思っていましたが、踏ん切りもつかず、ずるずると、停年まで来てしまいました。

話がそれましたが、時間のことに戻しますと、私などが、すぐに古くなっていくのは、やはり時代の変化が激しいからのような気がします。学生たちもそれは、非常によく感じ取っているのでしょう。ただ、その変化は、あまり大きな、あるいは根源的なところでの変化ではなく、より身近な、日常的な事象の変化というか、科学技術の進展に裏付けられた技術がささえる様々な機器の日進月歩といったことのような気がします。私も含めて、中高年者は、こうした変化に対しては、よく知られているように、一方では、懐疑という武器をもちだし、他方では、追従という空しい努力を差し向けるということになるわけです。

教育と研究

そうした変動の荒波を受けながらも、社会科学をベースとした研究と教育をしてきたものとして、学期末にも、いわゆるテストではなくレポートを課してきたわけですが、インターネットから、ほとんど無尽蔵に、文献や資料の入手が可能なので、学生のレポートも次第に高度になってきて、読んだり、評価したりするのが容易でなくなってきたということがあります。それには、ふたつありまして、ひとつは、3年生ぐらいになると、授業の想定枠をはるかに超えた情報を盛り込み調理してくる学生もいるので、そうした新しい情報や知識、文献などに、教員も出来るだけ精通している必要が生じるということです。もう一つは、教員から見ると、学生もだんだん巧妙になってくるので、オリジナリティを読み取ることが、ますます困難になるということです。なんととっても採点に時間がかかるし、それなら全体的に「甘く」しようか、それともレポートは止めにしてテストにしようか、ディレクマは際限なく深まっています。そういえば、評価法は

やったが、そもそも教育的評価とは何か、もっと、教員仲間と論議すべきだったと、後悔しています。

もちろん、研究の分野での変化も激しいものがあります。それも二つあり、ひとつは「流行」です。テーマにも研究方法にも、それはあります。社会福祉の分野に限ってみますと、テーマは、今は、現行の制度やサービスやそれに関連した実践的なものが大半で、基礎的研究は少ないように思います。また、研究手法としては、テーマとも関連しますが、「モデル研究」が多くなっているように思います。もうひとつは、学問の細分化、個別化科学化という流れです。これは流行というよりも、もっと大きな底流とも言えるものです。私などは、若いころから、流行には無頓着で、それこそ、流行に対しては懐疑という刺客をさしむけて、お茶を濁してきたわけですが、近年は、若い研究者が多くなり、多勢に無勢で、そうばかりもいかないので、とりわけ、後者は、個別化、細分化しながら相互に隣接化していくという重要な側面をもっているのです。私としても、より若い研究者の人たちに、絡んだり、教を請うたりして、精一杯、知ったかぶりを決め込むというスタンスに変わってきました。それでも、やはり消化不良は否めず、それぞれの研究には、とりわけある程度長くやってきた者にとっては、内容でも方法においても、内発的發展ということも重要なのではないかなどと開き直ると、また深いディレンマが落ち込むことになってしまいます。大江健三郎の比較的初期の小説「遅れてきた青年」ではありませんが、畢竟、中高年者にとっては、時代遅れは宿命で、遅れを取り戻すのではなく、遅れの意味を悟るものだと自分に言い聞かせています。

現場・地域と研究

翻って考えてみますと、県立大学での研究には、開学時から、研究面でも、県民あるいは県政への貢献ということが強く求められていました。一兵卒としてはあまり、そのことを真剣には考えてこなかったのですが、社会福祉は実践学ということですから、それも当然のこともうのようにも感じて来ました。しかし、何をテーマや課題にするかということも一筋縄ではいかないのも、また、当然のことです。臨床や政策の「現場」での「必要性」が、そのまま研究のテーマや課題になるわけではありません。それは、そうした必要性を無視するというではありませんが、委託調査や行政

調査を受ける時でも、なにがしかの研究的貢献をするぞ、といった気負いみたいなものが、何か、常にあったように思います。多少、理屈がかったことや、研究的なうんちくを盛り込んでも、どれだけ役にたつのかという思いもありましたが、何か「譲れないもの」があるような気がして、ついつい無理を通し勝ちで、初めのころは、「難しいことをいいますね」などと揶揄されました。私の相手をさせられるほうも大変だったでしょうが、議論していくうちに、面白いですね、とお世辞をいってくれる人も中には出てきました。お世辞と本音が混ざってくると、こちらも得ること、学ぶことが多くなり、文字通り、現場との共同研究の意味合いが強くなっていったような気がします。

こうした共同作業は、なにも行政や社協や、事業団などに限ったものではありません。福島県の会津で4半世紀にわたって続けてきた研究テーマの多くは、地域の人たちから出された「宿題」を、私なりに研究に昇華したものです。宿題は、次々と出され、科学的研究手法でバツサリやって、こちらの用事が済んだら、さようなら、というわけに行きませんので、粘りと忍耐を旨として、信頼関係を築きながら進めるという非効率的な研究スタイルにならざるを得ませんが、そこにはそこでまた面白みがあって、本学部の独特の忙しさにかまけて、つい、だらだらと来てしまいました。食べ残しというか、やり残しが多く、潔く停年できずに、醜態をさらす結果と相成っている次第です。

思い残し

個人的な感傷はこれぐらいでやめにしましょう。社会福祉は、現実の社会の中で生き、生活し、関係を結び合って生きている人間やその集団を対象としているわけですから、どの部分をとっても研究の「対象」は複雑にならざるを得ません。震災のように、人間の生命や生活の基盤そのものが失われたり、危うくなった状況下では、なおさらのこと、多様な研究法を生かした、研究者の共同による課題の多面的な解明と掘り下げが、強くもとめられているように感じます。私が非力だから、あまり出来なかったから、余計にそう感じるのかもしれませんが、細分化の反面、今また、多くの自然科学の分野で幅広い共同研究が進んでいることを見るにつけても、大学における共同研究の意義が改めて問われてしかるべきことのような気がしてなりません。